



TITLE:

自由貿易主義の吟味(下) - マノイレ
スコの理論に據りつゝ -

AUTHOR(S):

岡倉, 伯士

CITATION:

岡倉, 伯士. 自由貿易主義の吟味(下) - マノイレスコの理論に據りつゝ -.
經濟論叢 1940, 51(2): 204-220

ISSUE DATE:

1940-08

URL:

<https://doi.org/10.14989/131426>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號二第卷一十五第

月八年五十和昭

哀辭

故財部教授遺影署名及原稿

論叢

支那の農家負債と農地の抵押……………經濟學博士 八木芳之助
水産資源の保全について……………經濟學博士 蜷川虎三

時論

東亞新秩序建設と新國民政府_{の發展性}……………文學博士 矢野仁一

研究

民國初期の兌換券……………經濟學士 徳永清行
自由貿易主義の吟味……………經濟學士 岡倉伯士

記事

財部教授逝く

故財部教授年譜及著書論文目錄

追憶文

神戶正雄 本庄榮治郎 蜷川虎三
木村喜一郎 吳文炳 宗藤圭三
青盛和雄 松岡孝兒 石川興二
黑正巖 藤本幸太郎 谷口吉彦
岡崎文規

附錄

彙報

外國雜誌論題

自由貿易主義の吟味（下）

—— マノイレスコの理論に據りつゝ ——

岡 倉 伯 士

三 勞働生産性の概念

國民經濟の觀點からすれば、その國民經濟に對してより大なる純生産従つて國民所得の増加により著しい貢獻を齎らす企業乃至生産部門が、より高く評價さるべきであらう。かゝる立場からすれば經濟活動の目的は純生産にあり、その手段は勞働及び資本である。一定の勞働及び資本を以てより大なる純生産を實現する部門は國民經濟的により生産的であると考へられる。そこで異なる二つの部門を國民經濟の觀點から比較するに際しては、一方では純生産の比較と他方では各々の部門に雇傭されてゐる勞働及び資本の比較との二つの問題が提出される。而して特定部門の一經濟期間に於ける純生産はこの部門の總生産から既存價值 (Præexistente Werte) を差引いた價值差額であるが、マノイレスコはこの既存價值の内容として原料、補助原料、動力、燃料及び設備の償却の價值を舉げてゐる。これ等の諸項目は過去の經濟活動の成果であり當該部門の當該經濟期間に於ける經濟的成果には無關係な價值項目であるから、特定部門のある與へられた經濟期間に於ける生産的貢獻の評價が問題である際には當然に控除項目と考へられねばならない。かくて純生産は總生産の價值から既存價值を差引いた價值差額であるか

ら、その内容をなすものは勞銀、租税、利子、地代及び企業家利潤等の所得項目であり、それ等は與へられた經濟期間に於て當該部門によつて國民經濟に分配される。これ等の諸項目のうち勞銀以外の諸項目は謂ゆる餘剩價值であるから、純生産はまた勞銀額と餘剩價值額とから成る。勿論企業者の個人的立場からすれば勞銀額は費用項目に屬し従つて純收益には數へられない。けれども、特定の生産部門が一定の勞銀にて一定の雇傭をなすことは、國民經濟の見地からすれば經濟的貢獻と見做される。『ある企業(または生産部門)が勞働機會を提供する』ことは確かに一つの國民經濟的貢獻である。²⁸⁾

ところで一企業乃至一生産部門の國民經濟的生產性は純生産の大小のみによつては判斷され得ない。この判斷を行ふためには一定の純生産が幾何の手段即ち如何ほどの勞働及び資本を以て實現されたかを知らねばならぬ。マノイレスコは勞働單位(勞働者一人)當りの純生産を勞働生産性と呼び資本單位當りの純生産を資本生産性と呼ぶ。彼によればこの兩者の生産性概念は、『何等かの種類の經濟活動の國民的價值を測定するための二つの確かなとして論理的な手段』であるが、政策論的判斷に於てより重要なものは勞働生産性の概念であり、資本生産性の概念はたゞ副次的意義を持つにすぎない。彼は言ふ『二つの生産部門が比較されるためには一つの共通な比較の規準が必要であるが、すべての生産部門の最も重要な共通の要素は人間の勞働である。人間の禍福は著しくその經濟的業績乃至は一人當りの純生産に依存する。そしてこの一人當りの純生産は人間の消費能量即ち彼の經濟的欲望の充足に對する規準をなすものである』²⁹⁾……『一人當りのより大なる勞働生産性は、同時に住民一人當りのより大なる消費可能性を意味し、それ故に勞働生産性は人間社會の福祉の實際的且つ明確な標識である。』³⁰⁾ 確か

28) Manoiiesco: a. a. O. S. 50. 特定の企業乃至生産部門が外國資本によつて運営される場合には、その企業乃至生産部門が當該國民經濟に齎らす純生産は利子支拂、場合によつては利潤支拂をも差引いて計算された價值差額である。(Manoiiesco: a. a. O. S. 56) しかしこの場合と雖も殘餘の所得項目は純生産となるから、純經濟的見地からすれば、外國資本の誘致及び外國企業家の招致

に國民經濟政策の關心が國民のより高き經濟的福祉水準の實現にあり、且つ經濟的福祉水準の決定要因が國民各自の滿足の程度にある限り、マノイレスコの意味に於ける勞働生産性は經濟政策的判斷によつて資本生産性よりもより重要な意義を持つことは理解される。

以上はマノイレスコの勞働生産性の基本概念であるが、しかし彼はその勞働生産性について、一方では(イ)特定の企業または生産部門の勞働生産性と、(ロ)特定の生産物に附着してゐる勞働生産性とを分ち、他方では(イ)國內價格に基く勞働生産性と、(ロ)外國價格に基く勞働生産性とを區別してゐる。特定の企業または生産部門の勞働生産性は、その企業または生産部門によつて特定の經濟期間に實現された純生産をその企業または生産部門の生産的從業者數にて除した商である。これについては最早説明を要しない。これに反して特定の生産物に附着してゐる勞働生産性とは、その生物の總價值をその生産物が當該財に成熟するまでに經過したすべての生産段階に於ける生産的從業者數で除した商である。特定の生産物は一般に多數の垂直的な生産過程の結果である。従つて特定の終局生産過程に於て生産される生産物量の總價值は、その生産物が經過したすべての生産過程の純生産の總和である。それはその生産物が當該財に成熟するまでに經過した一つ一つの生産段階に於て分配された所得の總和である。従つてこの意味の總價值をその生産物が當該財に成熟するまでに經過したすべての生産段階の生産的從業者の總數で除した商は當該商品の生産が、その國民經濟の經濟的福祉水準に對して齎らした貢獻を表現すると言ひうる。³³⁾ところで純生産の價值にせよ、總生産の價值にせよそれは一定の物理的生産量をその生産物が賣れ行くときの市場價格で評價したものである。そこで評價の基礎となる價格が國內價格であるか外國價格であるか

は當該國民經濟に利益を齎らす。問題はたゞ外國資本の背況をなす政治意識にある。

29) Derselbe: a. a. O. S. 68, 69.

30, 31) Derselbe: a. a. O. S. 67, 69.

32) Die einer Ware zukommende Arbeitsproduktivität.

の別によつて既述の第二の分類がなされる。問題がある生産部門乃至はある生産物価値の國際的比較にある場合には外國價格(乃至は國際價格)に基く勞働生産性の概念が必要である。これに反して國內の異なる生産部門例へば農業部門と工業部門との比較が問題である際には、國內價格に基く勞働生産性の概念を用ふべきである。

いまある部門の純生産をP、勞銀額をS、資本利潤をMで示せば $P = S + M$ 。しかるにMは投下資本と利潤率との積であるから、固定資本をc、流動資本をk更に利潤率をiとすれば、 $P = S + (c+k)i$ かくて特定部門の勞働生産性は $\frac{P}{A} = \frac{S}{A} + \frac{(c+k)}{A}i$ となる。 $\frac{S}{A}$ は勞銀率であり、 $\frac{c+k}{A}$ は生産的従業者一人當りの資本額である。マノイレスコはこれを特殊資本(Das spezifische Kapital)と呼ぶ。特殊資本はある生産部門の機械化の程度を表現する。一生産部門の勞働生産性は勞銀率利潤率及び特殊資本の三つの要素によつて決定される。而してマノイレスコは特殊資本と生産諸部門間に於ける勞働生産性の差違の主要な原因であるといふ。³³⁾

理想的な自由競争が支配し勞銀率及び利潤率が一國內のすべての生産部門に於て均等であるとしても、異なる生産部門の勞働生産性は特殊資本の大小によつて相違しうる。しかるに一般に特殊資本は農業に於けるよりも工業に於て大であるから工業部門の勞働生産性は農業部門のそれよりも常に高いと言ふ。³⁴⁾

いまある生産物が、1, 2, 3の垂直的生產段階の結果であるとする。各生産段階に於ける純生産勞働、生産性及び生産的従業者数をそれぞれ $P_1, P_2, P_3, P_1, P_2, P_3$ 及び A_1, A_2, A_3 とすれば、終局生産段階に於ける生産物の總價值 $P = P_1 + P_2 + P_3 = P_1 A_1 + P_2 A_2 + P_3 A_3$ また生産物に附着する勞働生産性 $P_1 = \frac{P_1}{A_1 + A_2 + A_3} = \frac{P_1 + P_2 + P_3}{A_1 + A_2 + A_3} = \frac{P}{A_1 + A_2 + A_3}$ となる。 $A_1 + A_2 + A_3 = A$ と置けば $\frac{P_1}{A}, \frac{P_2}{A}, \frac{P_3}{A} = \frac{P}{A}$ 即ち生産物の總價值は生産物に附着する勞働生産性とその生産物が成熟するまでに經過した各生産段階の生産的従業者の總数との積である。³⁵⁾

次に P_1 は國內價格で評價された生産物總價值である。それ故に終局生産段階に於ける物理的生産量を π 、國內價格をVとすれば $P_1 + P_2 + P_3 = \pi V = P_1 A_1$ を得る。また外國價格をV'外國價格で評價された生産物の勞働生産性を π' とすれば $\pi' V' = P_1 A_1$ を得るから、外國價格で評價された勞働生産と國內價格で評價された勞働生産性との間には次の關係が存在する。 $\frac{P_1}{A} = \frac{P_1}{A'} \frac{V'}{V}$ しかる

33) Manoilesco: a. a. O. S. 76 ff.

34) Derselbe: a. a. O. S. 97. $\frac{P}{A}$ に於てAは勞働者数のみならず技術者支配人及び自ら企業を指揮する資本家の数をも含む(a. a. O. S. 69). それ故に $\frac{c+k}{A}$

に V/V は特定國の當該生産物の外國に對する價格優位乃至價格劣位を示す。 V/V ならば當該生産物の價格が外國價格よりも低いこと、從つて當該生産物の生産に於けるその國の價格優位を物語り、反對に V/V ならば價格劣位を物語る。それ故に外國價格で評價された生産物の勞働生産性は國內的勞働生産性 (innere Arbeitsproduktivität) と價格比率との積である。³⁵⁾

扱て吾々は生産物の總價值は生産物に附着する勞働生産性とその生産物の生産に従事した各生産段階に於ける生産的從業者總數(勞働量)との積であることを知つた。しかるに交換は常に等しい價值額の交換であるから、それはある財の生産に要した勞働及び勤勞の量のみならず、勞働生産性にも依存する。それ故に價值の實體を勞働に求め、交換を等しい勞働量の交換として取扱つた古典派は誤つてゐると言はねばならない。いまⅠ財とⅡ財とが交換されるとすれば、 $p_1 A_{11} = p_2 A_{21}$ が成立つ。若し p_{11} が p_{21} の二倍であるならば、 A_{11} は A_{21} の二分の一であらう。けれどもこのことは必ずしも勞働生産性の高いⅠ財の生産に従事した勞働者が勞働生産性の低いⅡ財の生産に従事した勞働者の二倍の勞銀率を獲得すると言ふことを意味するものではない。勞銀率は等しくとも利潤率及び特殊資本の大小によつて勞働生産性は相違しうからである。また同様の理由によつて上述の事柄は、熟練勞働は不熟練勞働の何倍かに還元されると言ふ古典派及びその流れを汲む一派の主張とも何等の關係も有しない。いな寧ろ特殊資本が大であり從つて勞働生産性の高い生産物の生産(機械化された生産)に従事する勞働の強度乃至は緊張度は、特殊資本の小なる生産に従事する勞働のそれよりも低いと考へられるから、上述の事柄は緊張度の低い小量の勞働が緊張度の高い多量の勞働と交換されることを意味しうるのである。いづれにせよ勞働生産性を異にする二財の交換は不均等な勞働及び勤勞の量の交換であることを物語る。若し不均等な勞働及び勤勞

はマルクスの餘剩價值率とその性質を異にする。マルクスの餘剩價值率は階級的對立を反映するが、マノイレスコのそれはかゝる要素を含んでゐない。それは一定資本額の國民的效果を表現する。

35) Derselbe: a. a. O. S. 97.

36) Derselbe: a. a. O. S. 96 und 107 ff.

の量の交換が收奪を意味するならば、この意味の收奪は勿論國內交換に於てもありうる。けれどもマノイレスコによれば『國內的收奪は耐へうる。何故なら一國全體として見ればかゝる收奪によつて何物をも失はないから。これに反して對外的國際的收奪は一國の全體によつて眞の損失を齎らす。國內的收奪は租税、社會的立法等により國民所得のより公正な分配を齎らすことによつてこれを防禦しうる。けれども國際的收奪の結果は不可避であり、それは被收奪國の立法を以てしては回避され得ない。それ故に收奪は商品交換の性格のうちに存するとは言へ、國內商業と國際貿易との間には非常な差別が存在する。國內商業は家庭商業であり、國內商業に内在する不公正は一の家庭事件である。』⁴⁰⁾

四 リカードの理論とマノイレスコによるその批判

(イ) リカード貿易理論の前提。リカードの理論は次の三つの前提に立つてゐる。(イ)商品の價值はその生産費に等しい。(ロ)生産費は専ら勞働費用(勞銀額)のみから成る。(ハ)勞銀率は一國內に於ては均等であり、從つて勞働費用は勞働量のみに依存する。この三段の假定によつて商品の絶對價值はたゞ勞働量のみに依存し、同一國內に於ける商品の交換はその生産に要した勞働量が等しい様に行はられると言ふ命題が成立する。ところで吾々の當面の問題にとつて特に重要なのは(ハ)の條件である。この條件は一國內に於ける生産要素の移動性は完全であると言ふことを前提とする。しかるにリカード自身も認める通り生産要素の國際的移動性は極めて不完全であり、從つて個々の國の勞銀率は不均等である。この事情がリカードの立場から國內交換と國際交通とを區別せ

37) Derselbe: a. a. O. S. 76 ff.
38) Derselbe: a. a. O. S. 78.
39) cf. Derselbe: a. a. O. S. 114.
40) Derselbe: a. a. O. S. 115.

しめる根本條件である。リカードの有名な例を引用してこの點を考究しよう。英國では一定量例へば一〇單位の羅紗及び葡萄酒の生産にそれ／＼一〇〇人及び一二〇人の年勞働を要し、ポルトガルでは同じ商品の同一量の生産にそれ／＼九〇人及び八〇人の年勞働を要するものとする。かゝる事情の下では英國に於ける交換比率は一單位の葡萄酒對一、二單位の羅紗であり、ポルトガルに於けるそれは一單位の葡萄酒對〇、八九單位の羅紗である。かくて英國及びポルトガルに於ける國內交換は等しい勞働量の交換となる。⁴¹⁾ところがいま比較優位の命題によつて英國は羅紗生産に特殊化し、ポルトガルは葡萄酒生産に特殊化するしよう。且つ國際交換比率が一對一、二と一對〇、八九との間のある點例へば一對一に定まると假定する。英國の羅紗一單位とポルトガルの葡萄酒一單位とが交換される。この交換比率は英國及びポルトガルの双方に有利である。けれどもこの國際交換は最早等しい勞働量の交換ではない。何故なら英國の羅紗一單位の中には吾々の假定の下では一〇人の勞働が含まれるに對し、ポルトガルの葡萄酒一單位の中には八人の勞働が含まれるにすぎないから。即ち『英吉利は八〇人の勞働の生産物に對して一〇〇人の勞働の生産物を與へるであらう』⁴²⁾と言ふ事態が起り、國際交換は國內交換とは異り不均等な勞働量の交換となる。而してこのような結果はリカードの立場からは勞銀の國際的不均等によつて説明する他はない。⁴³⁾實際またリカードは次の様に述べてゐる。『勞働の自然價格はそれが食物及び必需品を以て評價されてもこれを絶對的に固定不變なるものと解すべきものではない。それは……國を異にするに従つて大いに異なるものである。⁴⁴⁾

リカードは勞銀の國際的差違の根本原因を各國に於ける資本従つて勞働雇傭手段の蓄積の速度の差違によつて説明せんとする

41) 英國では12人の勞働の交換でありポルトガルでは8人の勞働の交換である。

42) リカード：原理 120頁(岩波版)

43) 新古典派の功績はこの點を展開したことにある。

44) リカード：原理 77頁

如くである。曰く『文化の遙かに進める國々の技術と知識とが輸入せられた新植民地に於ては資本は恐らく人間よりも急速に増加するであらう。而して若しも勞働者の缺乏が更に人口稠密なる國々によつて補足されることがなかつたならば、この傾向は大いに勞働の價格を騰貴せしめるであらう』⁴⁶⁾『……社會發達の種々なる段階に於て、資本の蓄積即ち勞働雇傭手段の蓄積の行はるゝことには遅延があり、そしてそれは何れの場合にも勞働の生産力によつて決定されざるを得ぬものである』⁴⁷⁾しかるにリカードに依れば勞働の生産力引いては資本の蓄積は、經濟發達の初期段階の國々に於ては人口の増加よりも急速であり、従つてかゝる國では勞銀は騰貴する。そこでは勞働に對する需要の増加が勞働の供給の増加よりも急速である。けれども經濟的發展が更に進行し人口が稠密となり耕作が品質の劣れる土地に及ぶにつれて資本の増加引いては勞働に對する需要の増加の勢は鈍化するが、一方人口の増加率引いては勞働の供給の増加の勢は恒久的に可成り不變である。かくして勞銀の騰貴傾向は停止しその下降傾向が始まる。また人口の増加するにつれて勞働の生産力は低下し生活必需品はその生産により多くの勞働を要するに至るのであるから、生活必需品の價格は、不斷に騰貴する。それ故に發展がある段階に到達すると貨幣勞銀が低下するのみならず實質勞銀も低下するに至る。⁴⁷⁾要するに勞銀率の國際的不均等はリカードの立場からは、(イ)諸國の資本蓄積の急速に差違があること及び(ロ)勞働の國際間の移動が不完全であるためにある國に於て勞働に對する需要(資本の蓄積)とその供給(人口の増加)とが不均衡な状態にあつても、それが勞働の供給がその需要を超過してゐる他國からの勞働の移動によつて調整され得ないことの二つの事情によつて説明される。

かくの如く勞銀率の國際的不均等の故に國際交通は必然に不均等な勞働量の交換となるのであるが、しかもなほリカードの立場からは『貨物の相對價值』従つて國際交換比率は殆んど専ら勞働の相對量によつて決定されると主張される。何故なら勞働の生産力乃至は勞働のインテンシティより一般的に言つて勞働の品質の差違は『一度形成せられるとあまり變動することがない』⁴⁸⁾からである。それ故にリカード理論の基本前提(イ)(ロ)が許される限り、國際交換に於てもまた勞働量のみが唯一の決定因子となり、勞働の質従つて勞働の生産力はこれを顧慮する必要がないことになる。けれどもリカードに於ては、勞働の品質即ち勞働の生産力は極めて狹義に解されて居

45) リカード：原理 79頁
46) リカード：原理 79—82頁
47) リカード：原理 16頁

り、労働の生産力は労働が如何なる性質の土地用役と結びつくかによつて決定されるものとせられてゐる。然し乍ら労働の生産力はまた労働と資本との結合の如何にも依存せねばならない。

以上のリカードの命題の言ふ意味はこうであらう。いま英國は高度に發展した國でありポルトガルは發展の初期段階の國である。リカードに従へば英國では資本の蓄積が鈍化し労働率が低下傾向を示す。またその反面に於て品質の劣れる土地が耕作されることになり労働の生産力は低下する。ポルトガルでは反對に労働率が上昇傾向にあり他方に於て労働の生産力も高い。かくて労働の動きと労働の生産力の動きとは平行的である。しかるに生産物の貨幣費用従つてまた價格は、リカードに於ては生産物一單位に含まれる労働量と労働率との積である。それ故に英國の羅紗とポルトガルの葡萄酒との交換比率は、英國の労働率と羅紗一單位の中に含まれる英國の労働量との積對ポルトガルの労働率と葡萄酒一單位の生産に要したポルトガルの労働量との積である。ところが労働の品質即ち労働の生産力の差違は、『一度形成されるとあまり變化することがない。』英國及びポルトガルに於ける労働の生産力の相對的關係引いては労働率の比率は大體に於て不變である。それ故に羅紗と葡萄酒との國際交換比率はその生産に要した各國の労働量の比率にのみ依存する。かく言ふのがリカードの立場からする労働率の國際的不均等と交換比率の關係に關する説明である。

労働の生産力は資本と労働との結合の仕方にも依存すると言ふ吾々の認識は、リカード自身もこれを注意してゐる。彼は言ふ『諸貨物の生産に投ぜられる労働が其相對價值を左右すると言ふ原則は、機械その他の固定且つ耐久なる資本の使用のために餘程修正を受ける。』⁵⁰⁾即ち彼もまた資本構成の差違が相對價值を變動せしめる一つの原因であることを認めてゐるのであるが、しかし彼は『貨物變動のこの原因は其效果比較的輕微である』⁵¹⁾としてこの要因を輕視する。

リカードはその價值論に於て資本構成の差違が交換比率の決定に對してある役割を演ずることに氣附いてゐたにかゝらず、彼はこの役割を輕視したがために、資本構成乃至は生産要素の組成率の差違が國際交換に於て演ず役割を全く省過してしまつたのである。而してマノイレスコの古典派貿易論に對する批判の最も重要な據點は、實に生産要素の組成率の高い部門は同一の労働及び勤勞の量によつてより大なる價值を實現するが故にその

49) このことは吾々の當面の問題の範圍に於ては、諸國の經濟發展の方向及び速度が大體に於て不變であることを意味する。

50) リカード：原理 25頁

51) リカード：原理 31頁

労働生産性はより高いと言ふ認識にある。

(ロ) マノイレスコによるリカード批判。扱て比較生産費の理論は一國の個々の生産部門の外國に對する生産優位の比較から出發する。リカードの例に於てはポルトガルの羅紗生産及び葡萄酒生産の英國に對する優位は、それ $\frac{100}{90} = 1.11$ 及び $\frac{120}{80} = 1.50$ である。 $1.50 < 1.11$ なるが故にポルトガルは葡萄酒生産に特殊化すべきであり、また英國のポルトガルに對する生産優位は $\frac{90}{100} = 0.9$ 及び $\frac{80}{120} = 0.67$ であり、 $0.9 > 0.67$ なるが故に英國は羅紗生産に特殊化すべきである。かく言ふリカード及びその一派の理論に於ては専ら生産に要した労働量の比較が問題とされる。ところで生産物の價值はその生産に要した労働量のみならず労働生産性にも依存し、 $P_i = \frac{L_i}{Q_i}$ なるが故に、一定の價值の實現に要した労働量とその労働生産性との間には反比例の關係が存在する。⁵²⁾ 従つてリカードの生産費に於ける比較優位の命題を労働生産性に於ける比較優位の命題に置き代へれば次の如くなる。⁵³⁾

ポルトガルの葡萄酒の労働生産性 $\frac{1}{Q_{PG}}$ > 英國の羅紗の労働生産性 $\frac{1}{Q_{UK}}$
英國の葡萄酒の労働生産性 $\frac{1}{Q_{UK}}$ < 英國の羅紗の労働生産性 $\frac{1}{Q_{UK}}$
ところがマノイレスコによれば、この不等式を満足すべき事例として次の三つの場合が考へられる。

(イ) ポルトガルの羅紗生産の労働生産性 $\frac{1}{Q_{PG}}$ > 英國の羅紗生産の労働生産性 又は ポルトガルの葡萄酒生産の労働生産性 $\frac{1}{Q_{PG}}$ > 英國の葡萄酒生産の労働生産性 $\frac{1}{Q_{UK}}$

この場合にはポルトガルに於ても英國に於ても羅紗生産の労働生産性は葡萄酒生産の労働生産性よりも大である。しかるに労働生産性のより大なることは、生産的従業者一人當りに對してより大なる國民所得を齎らすこと

52) Manolesco: a. a. O. S. 78.

53) ここでは労働生産性の國際的比較が問題であるから外國價格に基く労働生産性概念が用ひられる。

を意味する。かくて若しより大なる國民所得の實現と言ふことが經濟政策の目標であるべきであるとすれば、この場合にはポルトガルも英國も共に羅紗を生産すべきである。⁵⁴⁾

(ロ) ポルトガルの葡萄酒生産の勞働生産性 > ポルトガルの羅紗生産の勞働生産性 又は 英國の羅紗生産の勞働生産性 > 英國の葡萄酒生産の勞働生産性

この(ロ)の場合にのみ比較生産費の命題に従つての特殊化は、より大なる國民所得の確保と言ふ目的に合致しうる。

(イ) ポルトガルの葡萄酒生産の勞働生産性 > 英國の葡萄酒生産の勞働生産性 又は ポルトガルの羅紗生産の勞働生産性 > 英國の羅紗生産の勞働生産性

この場合にはポルトガルも英國も共に葡萄酒生産に特殊化することによつて、より大なる國民所得を確保することが出来る。

かくてリカードの意味に於ける比較優位の條件が満足されうる以上の三つの事例のうち、生産費の比較差の方向に従へる特殊化が同時に貿易當事國の双方に對して最大の國民所得を實現せしめるのは、たゞ(ロ)の場合のみにすぎない。それ故にリカードの命題は全く限られた妥當性しか有しないことになる。貿易が一國にとつて有利であるか否かを判斷するに當つては、吾々は單に比較優位の方向のみならず、その國に於ける諸部門の勞働生産性の優劣をも顧慮せねばならない。⁵⁵⁾ しかもリカードの生産費に於ける比較優位は勞働生産性に於ける比較優位に書き替へることが出来るのであるから、リカードの意味に於ける比較優位の理論はその意義を失ふことになる。それ故に『結局は勞働生産性のみが問題となる。そののみが決定的である』⁵⁶⁾ マノイレスコはこの様にリカードを

54) Manoleso: a. a. O. S. 181頁
 55) derselbe: a. a. O. S. 185
 56) derselbe: a. a. O. S. 185
 57) derselbe: a. a. O. S. 187
 58) derselbe: a. a. O. S. 188, 189

59) derselbe: a. a. O. S. 189

批判した後次の如き命題を導き出す。『ある國に於て二つの商品が外國價格によつて評價された異なる勞働生産性を以て生産される場合には、たとへ勞働生産性の小なる商品がその生産に於て外國に對し絶對的または比較的優位を持たうとも、勞働生産性の小なる商品の生産を斷念し専ら勞働生産性の大なる商品の生産のみを行ふことがその國にとつて有利である。』⁵⁷⁾『それ故に國民經濟活動は繼續的に最も生産的な生産部門に特殊化すべきである。』⁵⁸⁾しかるにマノイレスコによれば既に指摘した理由によつて、一般に工業部門の勞働生産性は農業部門のそれよりも高いから、彼の謂ゆる『國民經濟の集中法則』は、『工業活動の促進と言ふ方向に進むのであつて、農業活動の促進の方向に進むのではない。』⁵⁹⁾

扱て再びリカードの例に立歸つて考察しよう。英國の羅紗とポルトガルの葡萄酒との交換が兩國にとつて有利であると言ふ結論は次の如くして導き出される。先づポルトガルの立場から考へる。英國では一定量 Q_w の葡萄酒の生産に一二〇人の年勞働を要し、また一定量 Q_l の羅紗の生産に一〇〇人の年勞働を要する。それ故に英國では Q_w 量の葡萄酒は $120/100 Q_l$ 量の羅紗と交換される。しかるにポルトガルでは Q_w 量の葡萄酒は八〇人の年勞働によつて生産され、また Q_l 量の羅紗は九〇人の年勞働によつて生産されるから、 Q_w 量の葡萄酒は $80/90 Q_l$ 量の羅紗と交換される。かくてポルトガルは羅紗を輸入するならば、 Q_w 量の葡萄酒に對して $120/100 Q_l$ 量の羅紗を獲得しうるに反し、これを自ら生産すれば $80/90 Q_l$ 量の羅紗しか獲得出来ない。それ故にポルトガルは羅紗を輸入することによつてそれを國內で生産するよりも三五%だけ多く羅紗を獲得する。⁶⁰⁾同様に於て英國では Q_l 量の羅紗に對して $100/120 Q_w$ 量の葡萄酒が獲得されるに反し、ポルトガルでは Q_l 量の羅紗は $90/80 Q_w$ 量の葡萄酒と交換される。従つて英國が葡萄酒

60) $\frac{120}{100} Q_l : \frac{80}{90} Q_l = 1.35$ ポルトガルにとつての貿易利益を示すこの係数は、實は葡萄酒及びラシャ生産に於けるポルトガルの英國に對する優位の比率である。何故なら $\frac{120}{100} : \frac{80}{90} = \frac{120}{80} : \frac{100}{90} = 1.50 : 1.11 = 1.35$

をポルトガルから輸入することはこれを國內生産するよりも三五%だけ有利であることになる。⁶¹⁾

リカードを始め古典派及び新古典派に共通な以上の命題は、價值に於て等しい二財の交換は等しい勞働量の交換であると言ふ前提に立脚してゐる。しかるにこの前提は既に指摘した通り、すべての生産部門に於て勞銀率、利潤率及び技術構成が均等である場合にのみ妥當する。生産物の價值を決定するこれ等の三つの因子は同一國內に於ても生産部門の異なるに應じて異なる。假りに勞銀率及び利潤率は生産部門間の競争によつて均等化するとしても、技術構成が均等化すべき理由はない。生産の技術的條件がすべての生産部門に於て異なる以上、各生産部門間に於ける技術構成の差違は必然であり、従つてこの理由のみからしても交換比率は勞働量の比率のみによつては決定されない。

いま若し英國に於ける羅紗生産の勞働生産性が葡萄酒生産のその二倍であるとすれば、英國では Q_w 量の葡萄酒は $\frac{120}{100} Q_i$ 量でばなしに $\frac{1}{2} \frac{120}{100} Q_i$ 量の羅紗と交換される。従つてポルトガルにとつての貿易利益係数は $\frac{1}{2} \frac{120}{100} : \frac{80}{90} = 0.675$ となり、ポルトガルにとつて英國からの羅紗輸入は國內生産に比して三二・五%の損失となる。それ故に生産部門間に於ける勞働生産性の差違を顧慮するときは、リカードの意味に於ける比較優位の部門に特殊化することは、當該國にとつて必ずしも利益ではないことになる。

また若しポルトガルに於ける羅紗生産の勞働生産性が葡萄酒生産のその二倍であるとすれば、いまや Q_i 量の羅紗は $\frac{90}{80} Q_w$ 量の葡萄酒と交換される。従つて英國にとつての貿易利益係数は $\frac{90}{80} : \frac{100}{120} = 1.35$ となり、貿易は英國にとつて一七〇%も有利になる。⁶²⁾この簡単な考察は比較生産費の理論及びその政策論的歸結としての自由貿易論の缺陷を指摘するに充分であらう。

(ハ) マノイレスコによる定式化。マノイレスコは進んで工業國と農業國間の國際交通の一般法則を定式化して

61) $\frac{90}{80} Q_w : \frac{100}{120} Q_w = 1.35$

62) Manolesco: a. a. O. S. 197, 198.

derselbe: a. a. O. S. 202 ff. p_i, p_i, p_a, p_a はそれぞれ工業國及び農業國に於ける工業生産物及び農業生産物の勞働者一人當りの年勞働生産性 $Q_i, q_i, Q_a,$

る。⁽⁶³⁾

$$\begin{array}{l} \text{工業國} \left\{ \begin{array}{l} \text{工業生産物 } P_i = Q_i \times V_i \\ \text{農業生産物 } P_a = Q_a \times V_a \end{array} \right. \quad \text{農業國} \left\{ \begin{array}{l} \text{工業生産物 } P_i = q_i \times v_i \\ \text{農業生産物 } P_a = q_a \times v_a \end{array} \right. \end{array}$$

また兩國に於ける工業生産と農業生産の勞働生産株の比率をD及びdとすれば、 $D = \frac{P_i}{P_a}$ 、 $d = \frac{p_i}{p_a}$ 、更に兩國の農業生産物の價格の比率をa工業生産物の價格の比率をiとすれば、 $a = \frac{V_a}{V_i}$ 、 $i = \frac{v_i}{v_a}$ 、⁽⁶⁴⁾農業國は農業生産に於て優位を持つとすれば、 $a < i$ となる。吾々の問題はかかる條件が與へられてゐる場合に、農業國が農産物の生産に特殊化し工業生産物の生産を斷念すべきか否かにある。若し農業國がその必要とする工業生産物を國內で生産すれば、勞働者一人の年勞働によつて q_i 量が生産される。これに反して工業生産物を輸入によつて調達すれば、勞働者一人の年勞働によつて $\frac{q_a V_a}{V_i}$ 量の工業生産物が獲得される。かくて貿易が農業國にとつて有利であるためには、 $\frac{q_a V_a}{V_i} > q_i$ でなければならぬ。つまり $r = \frac{q_a V_a}{V_i} : q_i$ と置けば、rは貿易利益係數であり、 $r > 1$ ならば貿易は農業國に有利であり、 $r < 1$ ならば貿易は國內生産よりも不利である。しかるにこの貿易利益係數は $\frac{a}{i} : d$ と書き替へられる。若し $\frac{a}{i} > d$ ならば貿易は有利であり、 $\frac{a}{i} < d$ ならば國內生産が有利である。こゝまではマノイレ⁽⁶⁵⁾は誤つてゐない。しかし彼は生産費の比較差と價格の比較優位とを混同し $\frac{a}{i} > d$ の下に於ては、 $\frac{a}{i} > d$ なる條件が満足され難いことを論證することによつて、リカードを批判しようとする。けれども $\frac{a}{i} > d$ は農業生産物及び工業生産物の價格がいづれも農業國に於て絶對的に低いことを意味する。従つて兩者の生産物がいづれも農業國から工業國に輸出せられ、國際的貨幣機構の運動が作用し、やがて價格の絶對差の状態が出現する筈である。生産費の比較差は價格の比較差を意味しない。生産費の比較差の下でも貿易は價格の絶對差に従つて行はれる。

次に工業國の立場から考へる。工業國は若し農産物を國內生産によつて調達すれば、勞働者一人の年勞働によつて Q_a 量を獲得する。これに反して貿易によつて輸入するとすれば、勞働者一人の年勞働によつて $\frac{Q_i V_i}{V_a}$ 量の農産物を獲得する。それ故に貿易が工業國にとつて有利であるためには、 $\frac{Q_i V_i}{V_a} > Q_a$ 、工業國にとつての貿易利益係數をRとすれば、 $R = \frac{Q_i V_i}{V_a} : Q_a = \frac{a}{i}$ 、若し $\frac{a}{i} > d$ ならば貿易が有利であり、 $\frac{a}{i} < d$ ならば國內生産が有利である。しかるに假定によつて $\frac{a}{i} > d$ 、また工

自由貿易主義の吟味

q_a はそれぞれの國に於ける兩者の生産物の勞働者一人當りの年生産量、 V_i 、 v_i 、 V_a 、 v_a はそれぞれの國に於けるそれぞれの生産物の價格である。

(64) 若し $\frac{a}{i} > 1$ ならば農業國が農業生産物に於て價格優位を持つことを意味する。

(65) $q_i = \frac{r_i}{v_i}$; $q_a = \frac{r_a}{v_a}$ なる $\frac{r_i}{r_a} = d$ $\frac{V_a}{V_i} = a$ $\frac{V_i}{v_i} = i$ $\therefore r = \frac{q_a}{q_i} \times \frac{V_a}{V_i} = \frac{p_a}{p_i} \times \frac{v_i}{v_a} \times \frac{V_i}{V_a}$

業國に於ける工業生産の労働生産性は農業生産の労働生産性よりも大であると考へられるから、 $\frac{D}{I} \wedge \frac{I}{D}$ 故に $\frac{I}{D} \wedge \frac{D}{I}$ かくて以上の想定の下では農産物の輸入は工業國にとつて常に有利である。⁶⁶⁾ また貿易當事國に於て生産部門間に労働生産性の差違がなく、従つて $\frac{D}{I} \parallel \frac{I}{D}$ なる場合には、貿易利益の條件は單純に $\frac{I}{D} \vee \frac{D}{I}$ となる。⁶⁷⁾ しかも吾々の想定の下ではこの條件は當然に満足されるから、農業國は農業生産に工業國は工業生産に特殊化することが有利である。古典派の命題はこの場合にはそのまゝ妥當する。けれども農業國に於ける工業生産の労働生産性が農業生産のそれよりも著しく大である場合には、貿易は農業國にとつて損失を意味し得る。即ち $\frac{I}{D} \vee \frac{D}{I}$ は不可能なる條件ではない。例へば農業國は農産物に於て工業國に對し $\frac{D}{I} \parallel \frac{I}{D}$ の價格優位を持ち、他方に於て工業生産物に於て $\frac{I}{D} \parallel \frac{D}{I}$ の價格劣位を持つとする。また農業國に於ける工業生産の労働生産性は農業生産の労働生産性の二倍であるとする。しかるときは $\frac{D}{I} \parallel \frac{I}{D} \parallel \frac{D}{I}$ となり、貿易は農業國にとつて不利である。従つて安價な輸入は常に利益を齎らすと言ふ傳統的主張は破れる。労働生産性の低い生産物に於て價格優位を持つ國は、國內に於ける労働生産性の差違が國際的價格差の比率よりも大である場合には、貿易によつて損失を蒙る。しかるにその相手國は自國に於ける労働生産性の差違が大であればあるほど、益々大なる貿易利益を受ける。⁶⁷⁾ 従つて『工業の本來的な内的優位が強化すれば、貿易政策上の對立は増大し、この優位が低下すれば貿易政策上の對立は減少する。そしてかゝる優位が全く存在しない場合にのみかゝる對立は消滅し、農業國も工業國も共に外國貿易から利益を享ける』⁶⁸⁾

五 結 言

マノイレスコの理論はオーリン、ヴァイナー等によつて批判せられ、またシュナイダーによつて展開が試られた。⁶⁹⁾ こゝでは彼等の見解に立入つて論ずる餘裕を持たない。たゞ私にはオーリンやヴァイナーの批判はマノイレスコの理論の核心を衝くものではない様に思はれる。またハーバラーはマノイレスコの理論の性質をやゝ明確に理解し得たにかゝらず、彼の理論を單なる無競争集團の理論であると考へたために、マノイレスコの取扱へる

$$\frac{V_a}{V_i} = \frac{a}{i} : d$$

66) Manolesco: a. a. O. S. 213

67) $a > i$ なる故。

68) 何故なら D が大であればあるほど $R = \frac{a}{i} : \frac{1}{D}$ の値は益々大となるから。

如き状態は『全くありさうにないことである』と断定してしまつた。⁷⁰⁾ 若しハーバラーが一步進んでマノイレスコの理論は不均等な勞銀水準のみならず、利潤率及び資本構成の差違にも立脚してゐることを認識したならば、マノイレスコの理論を正當に評價し、進んではハーバラー自身の理論をも一步前進せしめることが出来たであらう。

マノイレスコの究局の結論はかうである。ある國に於ける異なる生産物の勞働生産性の差違の程度がそれ等の生産物の外國に對する價格優位乃至は劣位の程度の比率よりも大である場合には、勞働生産性の低い生産物を輸出する國にとつては貿易は不利であり寧ろその必要とする輸入品の國內生産が有利である。そしてこのやゝ面倒な結論はまた次の様にも言ひ替へられる。一國內に於て一定の費用支出を以て獲得される輸入財量と輸出財量との比率従つてその國に於けるこの二財の代替比率が、國際市場に於けるその國の輸出品と輸入品との交換比率従つて國際交換比率(國際價格比率)よりも大である場合には、その國はある財を外國から輸入するよりも寧ろ國內で生産する方が有利である。謂はゞその國にとつての貿易利益よりも生産利益の方が大きい。もつと解り易く言へば、一國は一定の費用支出を以て外國から買ふよりも國內で生産することによりより多量を獲得しうる場合にはその財を國內で生産すべきであると言ふのである。⁷¹⁾ ところで若し貿易當事國のすべての部門に於て費用法則が支配し、國際交換比率が二國に於ける代替比率の限界内で決定されるとすれば、上述の如き事態は起り得ない。上述の事態が起りうるためには、貿易當事國のいづれかの部門に於て費用法則が止揚されること従つて獨占的地位の支配があることを要する。かゝる獨占的地位が勞働者の側にあり、それが主として勞働組合の勢力に原因すると考ふべきか、それともまた企業者の側にありトラストやカルテルの個人主義及び營利主義の力に原因すると考ふべきかは別の問題である。吾々がマノイレスコの理論を高く評價するのは、彼の理論の妥當しうる經濟的地盤を反省することによつて貿易理論の新しい方向を確認することが出来ると考へるからである。吾々の見るところ

68) Manoilescu: a. a. O. S. 215.

69) Ohlin: Protection and non-Competing Groups W. A. Bd. 33, S. 38. ff. Viner: J. P. E. Vol. 40 (1932) p. 121. ff. E. Schneider: Über einige Grundfragen einer Lehre von Wirtschaftskreis W. A. Bd. 43 Heft I (1938)

70) 松井、岡倉: ハーバラー國際貿易論 上巻、321頁。

ではかゝる方向に則してのみ、最近の尖鋭化した國際的利害對立の實相を究明すると同時に、その對立を調整し新らしい國際秩序を生み出すための根本原則を提示することが出来る。

いま英國及びポルトガルのすべての部門に完全競争が支配し従つて費用法則の支配があるものと前提して、リカードの例を次の如く修正しよう。

英 國	ポルトガル	一單位の 労働量	單位貨幣費用 = 價格	代償比率 = 交換比率	國際交換 比率
羅 紗	葡萄酒	10	10	1.2	1
		12	12	1	
葡萄酒	羅 紗	9	10.8	0.89	1
		8	9.6	1	

かゝる事情の下では英國は羅紗一單位を輸出することによつて葡萄酒一單位を獲得する。これを國內で生産すれば羅紗一單位の獲得に要した費用を以て僅かに〇・八三單位の葡萄酒を得るにすぎない。またポルトガルは葡萄酒一單位を輸出することによつて一單位の羅紗を獲得することが出来るが、これを國內で生産すれば僅かに〇・八九單位の羅紗しか得られない。それ故に兩國にとつて貿易は國內生産よりも有利である。しかるにいま英國及びポルトガルの羅紗生産部門に獨占が支配し、羅紗の價格はその貨幣費用から背離するとしよう。例へば次の如く。

英 國	ポルトガル	一單位の労働量	貨幣費用	價格	代償比率	國內交換比率
羅 紗	葡萄酒	10	10	14	1.2	0.9
		12	12	12	1	1
葡萄酒	羅 紗	9	10.8	15	0.89	0.64
		8	9.6	9.6	1	1

かゝる事情の下では國際交換比率は 0.9 : 1 と 0.64 : 1 との間例へば 0.75 : 1 に定まるであらう。貿易は交換比率の上では双方の國にとつて利益である。けれどもポルトガルは一單位の葡萄酒を輸出することによつて僅かに 0.75 單位の羅紗を獲得するにすぎない。若し羅紗を國內で生産すれば一單位の葡萄酒に要したと同一の費用を以て 0.89 單位を得る。それ故にかゝる場合にはポルトガルにとつては貿易よりも國內生産の方が有利である。(康德七年五月九日)

71) 即ち $r = \frac{a}{1} : d = \frac{V_a v_i}{V_i v_a} : \frac{q_i v_i}{q_a v_a} = \frac{V_a}{V_i} : \frac{q_i}{q_a}$ であるから $\frac{V_a}{V_i} < \frac{q_i}{q_a}$ なるときは貿易よりも國內生産が有利となる。